

移設された慰霊碑に花を供える人々（11日、宮城県女川町で）



「語り継ぐ命」決意新た

再生の歩み

東日本大震災

東日本大震災の津波で犠牲になった七十七銀行女川支店（宮城県女川町）の行員の家族会が、7年前に建てた慰霊碑を支店跡地近くに移設した。町の復興が進み、石碑が立つ町有地から移すことになり、別の土地を取得した。震災から11年3か月の11日、遺族らは教訓を語り継ぐ決意を新たに

女川銀行員慰霊碑を移設

くに高台があったが、行員たちは上司の指示で2階建ての支店の屋上に避難し、津波にのまれた。建物は翌年に解体され、遺族らは跡地に花壇を置いて手を合わせた。復興工事が始まると、近くの町有地に移し、2015年3月に慰霊碑を建てた。行員をイメージして制服姿の男女をかたどった高さ1・4メートルの石碑には、「どんなに無念だったであろう」「震災を教訓に職場の命守れ」などのメッセージを記し、背面に「語り継ぐ命」と刻んだ。

再生された町で、慰霊碑は悲劇を伝える数少ない場所だ。長男の健太さん（当時25歳）を亡くした家族会代表の田村孝行さん（61）、



妻の弘美さん（59）は、石碑の前であの日のことを語り、命の尊さを伝えてきた。「いのちの広場」と名付けられた場所」でもある。移設先は支店跡地から160坪ほど離れた約100平方坪の土地で、5月下旬に移設作業を行った。高台を背にした石碑は、3月11日に朝日が昇る方角

を向く。命を語り継ぐ、つなぐ場所になりたいと願った。「いのちの広場」と名付けられた。11日は石碑のお披露目会が行われ、黙とうの後、地元の子どもたちが周囲にシタレザクラの木などを植えた。田村さんは「私たちがいなくなった後も、子どもたちが次の世代に震災を伝える場所になってほしい」と願っている。

新たな特産 熟成中

「挑戦する姿を通して町の人たちに元気を与えたかった」。たわわに実ったバナナの前で、福島県広野町でトロピカルフルーツミュージアム館長を務める田村弘一さん（58）は笑顔を見せた。前職は材木店の店主。原発事故で県産の木が売れず仕事を失った。農業は未経験だっ